

住民主導のまちづくりの今

年末年始、自粛のため帰省を見送り、故郷に思いをはせた方も多いのではないだろうか。

筆者にとっての「ふるさと」は地方都市であるが、「まち」としての状況を考えると、近年、人口の減少を背景に、活力低下が問題としてある。これまで「地方創生」に関わる各種施策が展開されてきたが、近年は「住民の力」をまちづくりに積極的に生かすべく「シビックプライド」という概念が注目されている。

「シビックプライド」とは、「都市に対する市民の誇り」を意味する。単なる郷土愛ではなく「ここをよりよい場所にするために自分自身が関わっている」という当事者意識に基づく自負心を意味する。住民自身による地域活動への参加を促し、地域活動への参加がシビックプライドを育む。すなわち、相互に作用する関係にある。

県内でも政策に取り込む動きがある。「伊賀市シティプロモーション指針（伊賀市）」では、シビックプライドの醸成が定住・Uターン人口の増加や市民による情報発信の増加などをもたらすとし、市の中核的な取り組みに位置付けている。

住民主導によるまちづくりの事例もみられる。津市安濃町では昨年「アノウラボ」というプロジェクトが始まった。地元有志が、地域内に交流拠点を構え、「安濃町をみんなで作ろう」をコンセプトに、地元情報を発信するメディアの運営や、地域内物件のリノベーション活動など「住民持ち込み企画」によるさまざまな活動に派生している。地域活動の盛り上がりに加えて、他地域住民との交流機会の増大という相乗効果も生まれている。

住民主導のまちづくりは「参加そのもの」をいかに「面白い催し」として位置付けられるかがポイントとなる。住民の地域活動への関与によるシビックプライドの涵養（かんよう）が、活動の環（わ）の広がりや地域の魅力向上につながることを期待したい。

（コンサルティング事業部 調査グループ 主任研究員 中村 哲史）